

文化としてのスポーツを考える

山田稔

玉川学園・玉川大学

健康・スポーツ科学研究紀要

第 19 号

「文化としてのスポーツを考える」

山田 稔*

来年はいよいよ東京 2020 オリンピック・パラリンピック開催の年となる。わが国の歴史に残る大きなイベントを通して、文化としてのスポーツが人々の生活や人生を豊かにできるよう、体育・スポーツに関わる者として、少しでも貢献したいと考えている。そのためには、スポーツが人々の生活や人生を豊かにするかけがえのない文化となっていることやスポーツが、現代生活の中で重要な役割を果たしていることなど、スポーツの価値を深く学ぶことが重要である。

そこで、本稿では本学園の創始者である小原国芳先生と一時代を共にした、澤柳政太郎（さわやなぎまさたろう）（1865 - 1927）先生の功績を中心として述べていきたい。（以下、敬称略）

澤柳は学校衛生に多大な関心を払っていた文部官僚であり、教育学者であった。在任中は、普通学務局長の地位にあつて「小学校令」の改正【1900（明治33）年8月】にあつている。この改正には、澤柳のブレインの一人である三島通良（みしま みちよし）（1866-1925）（当時、学校衛生顧問会議主事）の存在も大きかった。この改正によって、「小学校令」の中には、児童の健康保護と身体発育をはかる立場から、授業時間の軽減、通学距離・時間への配慮、就学年齢の明記等、児童の「負担の軽減」に主眼を置いて小学校令の改正が行われたのである。

澤柳や三島は、当時の児童生徒の健全な身体発達に影響を及ぼす教育環境や疾病要因を改善しようとした先駆的な人々であった。現在の学校衛生、学校保健、保健教育に多大な影響を与えた先人であった。

澤柳は、1917（大正6）年、成城小学校に初代校長として赴任している。それから2年後、本学園の創始者である小原が訓導者として招かれ、10年間を成城学園で過ごしている。小原は成城学園での勤務時代に、「全人教育」の目的である、人間文化の6つの要素を「真（学問）」、「善（道徳）」、「美（芸術）」、「聖（宗教）」、「健（身体）」、「富（経済）」

と捉え、真善美聖の土台として健富があると提唱している。

小原にとって、成城学園での勤務はその後の玉川学園創立にあたり、大きな影響を受けた時代であったと推察される。「健」と「富」を人間文化の土台として位置付けたことも、澤柳や三島との関わりによる影響があったと考えられる。

今、学力観に関わって、「コンピテンシー」「資質・能力」「汎用的スキル」といった言葉で、単なる知識・技能の定着や習熟等、教員側から見えやすい学力から見えにくい全人的な育ちを含めるべく学力へと拡張されようとする時代となった。

単なる知識・技能だけでなく、澤柳や三島、小原が挙げた功績のように、世の中に役立つもの、人々の日常生活がより良くなり、健やかで健康な生活が送れるよう、運動・スポーツを通して、社会に貢献していける人材の育成が求められている。

現在、研究者間でも学際的研究と言われるように、自らの専門領域のみを掘り下げる研究（いわゆる蛸つば理論）から他分野との関連の中での研究が求められるようになってきている。個々人の知識の限界を前提とし、今日の社会の成り立ちには最先端の異なる知識の連携・結合が必須と言われている。

あらためて澤柳や三島、小原らが成し遂げた功績を踏まえ、スポーツ史、スポーツ医科学、スポーツ心理学、スポーツ社会学、健康社会学等の幅広い学問分野を俯瞰することが必要である。学生には、文化としてのスポーツを考える機会を多く設け、運動・スポーツの持つ価値について意見交換を続けながら、若い世代が考える文化としてのスポーツを共に創造していきたいと考えている。

参考文献

教師のための教育保健学（2016. 日本教育保健学会編）

日本学術会議 100周年シンポジウム（2018. 配布資料）